

歲旦

おめでとく
おめでとう
おめでとう
おめでとう

常盤乃充松



傳書大夫

常盤津大松翁

常盤津喜美夫

脇

常盤津國大夫

常盤津八重太夫

脇

常盤津喜美夫

常盤津八嶋太夫

常盤津豊後太郎藤原光

常盤津喜美夫

常盤津家登太夫

常盤津和佐太夫

常盤津緑太夫

常盤津組太夫

常盤津三都太夫

常盤津三國太夫

同 祖女太夫

常盤津豊壽齋

常盤津三盛太夫

線末三

岸澤式佐

上

岸澤仲助

上

岸澤壽助

上

岸澤和歌吉

上

岸澤佐先藏

上

岸澤六松

上

岸澤三藏

線末三



常磐津豊後大掾

岸澤古式部

常磐津
豊後大掾

常磐津の老松

常磐津豊後大掾直傳
作者 松樹翁述

能詞

寂よ納ゆる四方の國く 実のたやうでゑらん
折はし 却乃西梅津の何某とく 志半也これ
小舟を信ト常に歩とて 進びけ所或たつ 矢多と
着かへ 口は木の國也 秋津沙浪も 志半
田の海を 廉もろじも 殊あきや 湖の道乃末

安樂寺に 志半梅乃 志半春ちて ぬふ丁 ぬるの
梢を 松の 志半 誠も 時あや 十なる 涼き 縁ふ
歩とて 志半 志半 志半 の 志半 志半 の 志半
心のは 志半 志半 志半 志半 志半 志半 の 志半
あはれ 志半 志半 志半 志半 志半 志半 志半
何もの 志半 志半 志半 志半 志半 志半 志半
紅梅殿と 社何が 志半 志半 志半 志半 志半 志半

崇ても猶あまたさびこそよへぬこゝろ。
松と、何と申らん、からんをぞけよ。
是も垣ぬいすし、廿五とまきまの妙。
神本とんそろう、はさぬ是、先松乃おぞも。
心るもののみ、ぬ梅殿を、一談まむ。
名も若本はむさとし、むかある、うらうら。
さ。先松の老の身の陰、さびるもつ人乃。
翁さび、きつものもやと、先松と、一談せぬ神意。
心の、思や、はなは天神の、は自おのて、ぬ梅殿も。
先松は、皆末社と改ぬ、り唐の、帝の内、何を。
國の、文を、感あはし、ものをもとま、ぬ社文を。
好む本、はつし、らさる、ぬ又松、はむし、奉の。
始り、は、松の、何をもとま、ぬ、り、帝、尊と。
たま、ら、ぬ、松と、大夫と申、あ、か、ち、ら、ぬ、名、を。

松梅乃花の魁の母までゆきける妹は
 解はひ契りも水根をうけ軒掛
 葛蒲さきほやめもつらぬ月書出詠の園は
 福さびくは採かゝる麻環の甲せは契りも
 ちよみくさ菊乃節會のしめ子彼因乃代は
 兼意寺七百歳やも代八千代活もたるは
 鶴の巢と結ぶ緑の松乃内初息二夜了看は
 八文字七福神の初買ゆるらまゝの神楽拙子
 そとく椰子の始り、唐土罍の孔解が南蛮攻乃
 千阿初て椰子と作らぬらう悪鬼魔とと
 亡りて月をな帰来あゆみ今白中の瞳目よ
 八百葉ある神よあ椰子とせよあまうさた
 白く花の本蔭うらやしくと眠るや拙子の顔と
 耳とあせもいれ枝よあはれもあはれ

ちんぽく〜と^{まひ}あそ^ぶお城^を目^めがけとび^ぶら
 く〜く〜も〜く〜^{いひまひめ}極^く難^{なん}も^もあ^あら^らど^どー^や
 文^{ぶん}珠^{じゆ}乃^の洋^{やう}土^ど是^{これ}あ^あぶ^ぶむ^む〜^やら^らぐ^ぐぬ^ぬ代^{だい}ち^ちき
 石^{いし}蔵^{ざう}や^やた^たり^りて^て昔^{こけ}乃^のむ^むひ^ひ松^{まつ}の^のき^き〜^の代^{だい}
 常^と磐^{とき}津^づの^のつ^つま^ませ^せぬ^ぬ家^けこ^こそ^そあ^あ〜^なあ^あれ

東^{とう}洋^{やう}堂^{だう}印^{いん}


安政六壬未年正月元日
 明治廿一戊戌年一月再版

常磐津正本版元

東^{とう}洋^{やう}堂^{だう}印^{いん}
 坂川平四郎



千種萬歳

大^{だい}々^々叶^え